〈実践研究〉

想像活動の活性化をはかる物語文の指導

――「スイミー」（レオ＝レオニ／作・絵）の場合――

広島大学附属小学校　神　野　正　喜

キーワード：想像活動の活性化，学習状況の設定，新聞記者，新聞記事，

［要旨］

物語文の授業を考えてみたとき，必ず話題にされているのが，人物の様子や心情，情景の様子である。学年，教材が変わっても，これらが話題にならない物語文の授業はない，といっても過言ではない。つまり，教師は物語文の授業において，学習者に人物の様子や心情，情景の様子を想像することを求め続けているとも言えよう。

そこで，教師の働きかけとして，学習者の想像活動がより活発に行われるような指導法を考えてみなければならない。その指導法として，筆者は，学習者が豊かな想像活動をせざるを得ない学習状況をさまざまに設定することを考えてみた。

本稿では，「スイミー」（レオ＝レオニ／作・絵，光村２年上）を取り上げ，学習者が新聞記者になって新聞記事を書くという学習状況の設定例を，学習者の想像内容と併せて報告する。

１．はじめに

指導方法，指導形態などの如何を問わず，物語文を読む学習指導の中で常に学習者が教師から求められる活動に人物の様子や心情，情景の様子を想像することがある。単元学習的な学習指導であろうと，読者論的な学習指導を展開しようと，読者である学習者は，教師の働きかけに応じて想像活動を求められるのである。

文学を読む価値の一つを，作品世界に参入し作品世界に生きることによって文学体験を持つことであると考えたとき，人物の様子や心情，情景の様子を想像することは作品世界に参入する手がかりであるから，そのことが学習活動の中心的な内容になるのは当然であろう。

一般に，読書において読者は，語，文，文章などの言語刺激に反応して，何らかのイメージを形成するという内的な精神活動を営んでいると考えられる。しかし，それがいつも活発に行われているとは限らない。そこで，学習指導の場で教師がなすべきことの一つとして，想像活動を活性化することが挙げられる。

文章を読むとき，読者は意識するとしないとに拘わらず，ある視点に立たざるを得ない。ある人

（もの）になる（立場に立つ）とか，ある観点から思考する，などである。

そこで，想像活動を活性化する手だてとして，例えば，明確な視点を持たせることが有効ではないか，という仮説を立てることが可能になる。なぜなら，想像活動の不活発な読者は，明確な視点を持つことができていないのではないか，と考えられるからである。言い換えると，「～になる」「～から見る」という精神活動ができにくい読者の想像内容は貧しいのでないか，と考えることができるのである。そこで，教師は，想像力育成のために，あらゆる働きかけ（発問，指示など）をもって，学習者に明確な視点を持たせることに努めることになる。さもなければ，明確な視点を持たざるを得ない学習状況を設定することに努めるのである。

物語文を読んで想像する内容は，主に人物の様子や心情，そして場面（周り）の様子であることが多い。したがって，物語文の授業場面で，教師は学習者に「人物の様子や心情と，場面(周り)の様子」を想像することを求めることが多くなるのである。

その際，発達段階の違いはあるが，「～はどんな気持ちでしょうか。」とか，「このときの場面の様子は，どうでしょうか。」といった問いかけだけでは，学習者の想像活動に刺激を与えることはできにくい。そこで，人物の＜見え＞（人物の目に何が映っているか）を問うとか，人物の表情を問うとか，場面を絵に描いて説明する等のさまざまな有効な手だてが考えられなければならない。

2．想像活動の活性化をはかる物語文指導の一例

物語文の指導においては，１学年のときから，絵本作り，劇化，動作化，絵画化，ペープサートの活用，などの手だてを講じて，学習者の想像活動の活性化を図ってきている。

本稿で取り上げる「スイミー」（光村２年上）では，スイミー新聞の記事を書くという学習状況を設定する。これは，新聞記者になった（つもりの）学習者に，さまざまな新聞記事（「事件記事（あらすじ)」，「スイミーへの独占インタビュー」，「後日談」，「小さい赤いお魚たち，スイミーを語る」，等）を書かせることによって，スイミーや小さい赤いお魚たちの気持ちや周りの情景を想像せざるを得ない場を設定しようというのである。

指導目標と指導計画は次のとおりである。

(1) 指導目標

◎ スイミー新聞を作る（新聞記事を書く）ことを通して，周りの情景やスイミーの行動，気持ちを想像しながら読み取ることができるようにする。

○ 場面の様子や登場人物の様子，気持ちが表れるように音読することができるようにする。

○ 音読や視写を通して，文章表現（比喩表現，倒置法，体言止め，など）のおもしろさに気づくことができるようにする。

(2) 指導計画（12時間）

第一次　全文を通読してあらすじをつかみ，心に残ったところを話し合う。読み取った内容を新聞に表すという学習のねらいを知る。……2

第二次　スイミー新聞の記事を書くことを通して，場面ごとに，周りの情景やスイミーの行動，

その気持ちを想像しながら物語を読み深める。……8

第三次　班ごとにスイミー新聞を作り，発表会（新聞コンクール）を開く。……2

指導計画の終わりに，それまでに読み取った内容をもとにして新聞記事を書き，新聞を作成することはよくなされるところである。しかし，ここでは，新聞を作成するために毎時間新聞記事を書く，という活動を設定する。つまり，毎時間用いるワークシートが即新聞記事になるのである。

また，学習活動への意欲を持たせるために，学習者の一人一人が「スイミー新聞社」の新聞記者になるという役割どりをした。

3．児童の想像内容とその考察

では，教師がどのような働きかけをしたのか，それに応えて，学習者がどのような読みを展開したのかを一児童（K. N男）の記述をもとにみてみよう。

(1) あらすじをとらえる

まず，あらすじをとらえさせる。一読後に，「どんなお話でしたか。書いてみましょう。」という指示を出すことによって，同じ活動を仕組むことはできる。だが，ここでは，次のような設問のあるワークシートを用意し，これに書かせることにした。学習者の意識では新聞記事を書いているのであるが，その実はあらすじをまとめているのである。学習に対する意欲を継続的に持たせるには，このような学習状況の設定が必要である，と考えている。

ワークシート（1）

「スイミー新聞社（しんぶんしゃ）」の（　K．N男　）記者（きしゃ）の記事（きじ）。

◎　あなたは，優秀（ゆうしゅう）な新聞記者（しんぶんきしゃ）です。「スイミー」を読んで，どんなできごとがおこったのかをつたえる新聞記事（しんぶんきじ）を書いてみましょう。新聞（しんぶん）を読む人がよくわかるように，じゅんじょよく書くと，いいですね。

それから，いつ，どこで，だれが，なにを，どうした，なぜ，がつたわる書きかたがいいです。

「あなたは，優秀（ゆうしゅう）な新聞記者（しんぶんきしゃ）です。」という一文は，学習者に書く意欲を持たせるために挿入したものである。新聞記事であるから，見出しも付けさせたい。

K. N男は，あらすじを次のようにまとめた。

［見出し］　「えらいぞ　スイミー」

ある日，海の中で，赤いさかなたちが，楽しくくらしていました。でも，その中にくろいいろのスイミーがいました。ある日，まぐろがさかなたちをおそい，たべてしまいました。いきのこったのは，スイミーだけ。こわかった。でも，くらげ，いせえび，いろいろ見て元気になった。そのとき，いわかげに，あの赤いさかなのきょうだいがいます。

スイミーは，

「外に出てきて，あそぼ。」
でも，さかなは，
「大きなさかなにたべられるよ。」
でも，スイミーは，
「いつまでも，じっとしてちゃいけないよ。考えなくっちゃ。」
　スイミーは考えました。スイミーは，
「かたまろう。大きいふりをして。」
　みんな，かたまることができたとき，スイミーは，
「ぼくが，目になろう。」
　そして，こわいまぐろを，どんどん海からおいだしました。

(2) 楽しい毎日を想像する

広い　海の　どこかに，小さな　魚の　兄弟たちが，楽しく　くらして　いた。

冒頭のこの一文にかかわって，スイミーを含む<小さな魚の兄弟たち>の「楽しい」毎日を想像させるのである。この日常的な楽しい毎日は，次の場面でのまぐろの襲撃と対比の関係になっている。よって，ここで楽しさの中身を具体的に想像させることができるかどうかは，次場面でのスイミーの悲しみ，嘆きの深まりを感じ取ることができるかどうかに関わってくるのである。

用意したワークシートは次のようである。臨場感をもった見聞記事を書かせるために，「きょうは，そこで，見てきたこと，聞いてきたことをおしらせしましょう。」という指示内容にした。これは，豊かな想像活動への誘いとなるものである。

ワークシート（2）

◎　わたくし，スイミー新聞社(しんぶんしゃ)の記者(きしゃ)，（　K. N男　）は，「広い海」の中をのぞいてみました。きょうは，そこで，見てきたこと，聞いてきたことをおしらせしましょう。

　まず，おにごっこをするようです。一れつにならびました。一ばんはじめのせんとうは，スイミーです。ついていくと，『くらやみのどうくつ』と書いています。入ってみます。まっくらです。スイミーのすがたが見あたりません。おっ，あわがでました。いました。スイミーです。
　スイミーは，
「もう，いいかい。五十びょうたったよ。」
と言っています。おにごっこじゃなくて，かくれんぼです。スイミーがうごきました。おくへ入っていきます。赤いろがいっぱいあります。かんたんに，赤いさかなを見つけました。

「もう，見つかっちゃったあ。」
「こんどはなにかな。」
おっ，スイミーの手にひょうがあります。こんなのです。一，くらやみかくれんぼ　二，リレー　三，ひなんくんれん　四，さんぽです。リレーは，あっという間にスイミーが一いです。ひなんくんれんとは，つりばりがきたら，どうするか，とかをべんきょうします。さいごは，さんぽです。どこにいくかは，一日ごとにかわります。ぼくがいったときは，さんごの森をたんけんしていました。とてもきれいでした。楽しいあそびや，いいべんきょうをしていました。

ここに見るように，K. N男は，かくれんぼをするスイミーたちについて行って，「くらやみのどうくつ」に入って見聞したことを報告する文章を書いている。終始，<外の目>からの視点に立った記述を心がけたり，推量表現を用いたりして，報告文にふさわしい書き方になっている。また，明暗や色を意識し，会話文を挿入するなど，表現の工夫も見られる。

なお，他の児童は楽しい毎日の中身を想像して，「たんけんごっこ」，「かくれんぼ」，「たからさがし」，「サッカー」，「カラオケ大会」，「おひるね」，「ドッヂボール」，「パーティ」，「うんどう会」，「かけっこ」などを挙げた。次の場面では，これらの楽しい日々を一瞬にして奪い去られてしまったスイミーの胸中を想像することになる。

(3)　<スイミー>という名前について考える

みんな　赤いのに，一ぴきだけは，からす貝よりも　まっ黒。およぐのは，だれよりも　はやかった。
名前はスイミー。

「スイマー」や「スイミング」を連想させる<スイミー>という名前は，だれにも負けぬ泳ぎの速さ，泳ぎの巧みさから付けられたものであろう。まさに名は体を表していると言うべきであり，この<スイミー>という名前について，どうしても話題にしておく必要があると考え，次のようなワークシートを用意した。

ワークシート（3）
◎　なぜ，<スイミー>という名前がついたのか，しっていますか。わたくし，スイミー新聞社（しんぶんしゃ）の記者（きしゃ），（　K. N男　）が，スイミーにインタビューしてきましたので，スイミーの言葉（ことば）を，そのままおつたえしましょう。また，スイミーが，その名前を気に入っているかどうかも聞いてみましたので，それもおつたえします。

ここでは，スイミーに単独インタビューしたという想定のもと，スイミーから聞いた（と想像した）言葉を書かせるのである。単独インタビューは，自分だけがスイミーと話をすることができたという設定であり，学習者の書く意欲をかきたてることになる。

それはね，スイスイおよげるようになってから，みんなにぬかされたことがないから，スイミーという名前がついたのさ。でも，「ミー」が，なぜつくかというと，ぼくのおじちゃんが，「ミー」というなまえは，なるべくつけろよ，と言ったんだ。だから，「ミー」というのがついて，スイミーっていうわけ。すきだよ。だって，はやそうで，かっこよくて…。でも，およげなかったときは，ノロミーとよばれてたんだ。

(4) 「ミサイルみたいに」という比喩表現を考える

ある　日，おそろしい　まぐろが，おなかを　すかせて，すごい　はやさで　ミサイルみたいに　つっこんで　きた。
一口で，まぐろは，小さい　赤い　魚たちを，一ぴき　のこらず　のみこんだ。

「ミサイルみたいに」という直喩が初めて登場する。比喩表現の指導では，譬えるものと譬えられるものとが持っている属性の共通点に目を向けさせることが肝要である。つまり，属性の如何なる部分が共通するから，比喩表現になり得ているのかを考えさせる必要があるのである。

一見すると，「ミサイルみたいに」は，その速さのみの譬えのようである。しかし，それだけではない。ミサイルの持つ破壊力，殺人性，目標物を追い続ける追尾性，なども含まれているはずである。さらには，まぐろとミサイルに共通する形（紡錘形）や色も譬えの内容であろう。

そこで，まず，児童が持っているミサイルの知識を出させた。そして，その後で，ミサイルの属性から類推できるまぐろのおそろしさを考えさせた。

ワークシート（4）
◎　ミサイルについて，しっていることを書きましょう。
◎　では，まぐろのどんなようす（ところ）がミサイルみたいに思えたのでしょう。

ミサイルについて知っていることを書かせてみると，「分からない」という者が9名（37名中）いたが，「せんそうにつかうもの」，「おちたらばくはつする」，「ばくだんよりも強い」，「全力でくる」，「ロケットのようなもの」，「ながれぼしのようにはやくとぶ」などの知識が出された。

これらのことから，何故，まぐろがミサイルのように思えたのかを考えさせ話し合わせたところ，「まぐろがものすごい速さでつっこんできたのだろう。」，「一発必中で，小さい赤いお魚を皆殺しにしてしまったのだろう。」，「その形がミサイルそっくりだったのだろう。」，「逃げようとしてもどこまでも追いかけてきたのだろう。」といった意見が出された。

教科書のこの場面の挿絵は，＜外の目＞から見た絵になっている。つまり，横向きのまぐろが小さい赤いお魚を襲っている絵である。学習者の想像する映像も，同じようなものである。

ところが，襲われている当事者である，小さい赤いお魚やスイミーにまぐろがどう見えたかとい

う<見え>を問うたとき，学習者は視点の転換を迫られることになる。おそらく，彼らにはまぐろの全体像が見えたのではなく，するどい歯の並んだ大きな大きな洞窟のような穴（口）が飛ぶように近づいて来る（近づくにしたがってどんどん大きくなりながら自分たちに迫り来る）ように見えたであろう。これがイメージ化できたとき，スイミーたちの恐怖はいっそう鮮明なものになる。

(5) スイミーの悲しみを想像する

> にげたのは　スイミーだけ。
> スイミーは　およいだ，くらい　海の　そこを。こわかった。さびしかった。とても　かなしかった。

何故，スイミーだけが助かったのか。どうして，暗い海の底にいるのか。「こわかった。さびしかった。とても　かなしかった。」の表現をどう考えるか。ここでは，それらを手がかりに，スイミーの気持ちを想像させることになる。

ワークシート（5）

◎ スイミーとなかよくなった，わたくし，スイミー新聞社（しんぶんしゃ）の記者（きしゃ）（ K. N男 ）に，スイミーが手紙（てがみ）をくれました。この手紙（てがみ）には，「ある日」のことが書かれています。また，スイミーの気もちも，くわしく書かれています。この手紙（てがみ）を，みなさんに紹介（しょうかい）しましょう。

スイミーが仲良くなった自分だけに手紙を書いてくれた，という設定である。仲良しの自分に，スイミーがその心情をどこまで明かしてくれるのか。その内容と分量とは，親密さの証しでもある。

> ぼくは，ひとりぼっちになっちゃったよ。どうしてって？　きょう，まぐろがつっこんできた。ぼくは，そこへにげた。でも，まぐろはおいかけてくる。兄弟はおそいから食べられたの。ぼくは，いま，うみのそこ。くらいんだよ。いまぼくは，上にいくとまぐろがいるかもしれないから，そこにいるんだよ。じぶんでは一ぴきでもいいから，兄弟がいればいいと思っている。できれば，また，ともだちができればいい。ひとりぐらしは心ぼそい。さびしい。こわい。だから，いま，ともだちをさがしたい。でも，こわくてさがせない。ごめんね。スイミーより

(6) 元気を取り戻したスイミーの様子を想像する

> けれど，海には，すばらしい　ものが　いっぱい　あった。おもしろい　ものを　見る　たびに，スイミーは，だんだん　元気を　とりもどした。
> にじ色の　ゼリーのような　くらげ。
> 水中ブルドーザーみたいな　いせえび。

見た　ことも　ない　魚たち。見えない　糸で　引っぱられて　いる。
ドロップみたいな　岩から　生えて　いる，こんぶや　わかめの　林。
うなぎ。顔を　見る　ころには，しっぽを　わすれて　いるほど　ながい。
そして，風に　ゆれる　もも色の　やしの　木みたいな　いそぎんちゃく。

ここは，「すばらしいもの」「おもしろいもの」を見ながら泳ぐスイミーの傍らにあって，スイミーの驚きの声を聞き，それを伝える新聞記事を書くという設定である。初めて目にするものに驚き，そして，だんだん元気を取り戻してくるスイミーの様子を表すことを求められる。

ワークシート（6）

◎　スイミー新聞社(しんぶんしゃ）の記者（きしゃ）の（　K.N男　）さんに，本社から連絡（れんらく）です。
「だんだん　元気を　とりもどした」スイミーは，いろいろなすばらしいものや，おもしろいものを見ましたね。
　そのときのスイミーの独り言（ひとりごと）を聞いて，知（し）らせてください。

うわあ，ゼリーだ。たべてみよう。あっ，くらげだ，つつかなくてよかった。さわっちゃった。にげろ。
あっ，こんどは，水中ブルドーザーだ。のってみよう。いたっ。なんだあ，いせえびだ。もう一回のってみよう。いたっ，いたっ。おもしろい。
あれっ，きれいな魚だ。うごいてないな。しんでいるのかなあ。でも，ひれ，うごいているもの。糸でひっぱられているのかなあ。
あっ，こんどは，ドロップだ。なめてみよう。うっ，うえっ，にがい。なんだ岩じゃないか。
こんどは林に入ってみよう。大めいろだ。すごいなあ。こんぶ，わかめ，いっぱいあるなあ。すごい。
わっ，このしっぽ。とことこ。わっ，うなぎだ。しっぽどうだったっけ。あたまは，とことこ。しっぽは。よほどながいなあ，このうなぎ。
やしの木だ。ちがう。いそぎんちゃくだ。さわってみよう。だめだめ。にげれなくなっちゃうもんな。でも，風にゆれてるほんものの，やしの木みたい。

上の記事からは比喩表現の読み取りの程度を伺うことができる。学習者にとってイメージ化しにくいと考えられる，「見たこともない魚たち。見えない糸で引っぱられている。」の部分，つまり，糸で引っぱられているように見える魚の様子も，それなりに想像できているようである。また，スイミーの楽しさ，驚きが伝わってくる記事にもなっている，と評価してよいであろう。

(7)　スイミーは，こんなお魚！

その　とき，岩かげに　スイミーは　見つけた，スイミーのと　そっくりの，小さな　魚の兄弟たちを。
スイミーは　言った。
「出て　こいよ。みんなで　あそぼう。おもしろい　ものが　いっぱいだよ。」
小さな　赤い　魚たちは，答えた。
「だめだよ。大きな　魚に　食べられて　しまうよ。」
「だけど，いつまでも　そこに　じっと　して　いる　わけには　いかないよ。なんとか　考えなくちゃ。」
スイミーは，考えた。いろいろ　考えた。うんと　考えた。
それから，とつぜん，スイミーは，さけんだ。
「そうだ。みんな　いっしょに　およぐんだ。海で　いちばん 大きな 魚の　ふりを　して。」
スイミーは　教えた。けっして，はなればなれに　ならない　こと。みんな，もち場を　まもること。

いつまでもまぐろに脅えて暮らそうとする新しい仲間たちを，何とかしようというスイミーの姿がここにはある。それは，<まっ黒>で<およぐのは，だれよりも　はやい>だけのスイミーではない。ここで学習者は，新たなスイミー像を発見するのである。

ワークシート（7）

◎　「スイミーって，どんなお魚？」ときかれたら，どうこたえますか？
「からす貝よりも　まっ黒な　スイミー。」
「およぐのは，だれよりも　はやい　スイミー。」
でも，ほんとうのスイミーは，それだけではありませんね。
スイミー新聞社（しんぶんしゃ）の記者（きしゃ）の（　K．N男　）さんから，スイミーのすばらしいところを，しっかりとお話してください。

［見出し］　「ゆうかん　スイミー！」
スイミーは，赤い魚の兄弟みたいに，岩かげでじっとしているんじゃなくて，考えようとしている。スイミーは，いろいろなことを考えて，まぐろをおいだそうとしてたちむかう。スイミーは，とってもゆうかん。そして，考えついたら，そのこと（たとえば，つくりかた。かたまって，きみはしっぽ，きみはあたま，というふうに）をわかりやすく，おしえてあげて，ぜったいできるようにしてくれるから，えらい。それに，スイミーは，なんでも，たちむかってやってくれる。だから，スイミーは，赤い魚とくらべたら，だれよりも，ゆうかんだ。

(8) 小さな赤いお魚からスイミーへの言葉

みんなが,一ぴきの　大きな　魚みたいに　およげるように　なった　とき,スイミーは　言った。
「ぼくが，目に　なろう。」
朝の　つめたい　水の　中を，昼の　かがやく　光の　中を，みんなは　およぎ，大きな　魚を　おい出した。

何日も何日も練習を繰り返したであろう。やっと，「一ぴきの大きな魚みたいにおよげるようになっ」て，まぐろをおい出すことに成功する。その方法の発案者と練習の指揮者はスイミーである。ここでは，小さい赤いお魚たちに，そのスイミーの評価を語ってもらうという場を設定する。

ワークシート（8）

◎ スイミー新聞社（しんぶんしゃ）の記者（きしゃ）の（ K.N男 ）が,「小さい　赤いお魚たち」にインタビューしました。
「スイミーのことをどんなふうに思っていますか？」
すると，その中の一ぴきが，こんなふうに答えました。

スイミーさんのおかげで，いままでおそれていた，まぐろがこわくなくなって，ほかのものが見れるようになったよ。だから，ぼくたちみんなが，岩かげでびくびくしなくて，外に出てみんなであそべるようになって，とってもうれしいよ。スイミーさんの考えは，すごくよかったですよ。スイミーさんは，考えるのも，おしえるのもすごくうまいんですね。おかげで，みんなも，うれしがっているし，いつ，まぐろがおそってきても，おそれることはなくなった。
スイミーさんがおしえてくれたことをきちんとまもって，スイミーさんが目に…，なぜ，みんな，スイミーさんを目にしたかって？　目は見るやくで，ぼくたちは，岩かげでびくびくしていたほどだから，せんとうの目になれないよ。スイミーさんは，こわいから，にげよう，と言わずに，まぐろにおそいかかろうとしている。スイミーさんは，ゆうきがあるからです。考えてくれたり，おしえてくれたり，ありがとう。

4．おわりに

想像活動の活性化をはかる物語文の指導について，その実践例を報告してきた。この実践を通して，「どんな気持ちか。」，「どんな様子か。」という発問では生まれない想像力豊かな読みが生まれてきたと思うが，いかがであろうか。今後さらに，如何なる手だてが学習者の想像活動を活性化するのに有効であるかを考え，その検証に努めたい。

(1993年11月 9日受理)

[Abstract]

A literary teaching toward active imaginative activity of school children

——In case of the novel "Swimmy" written by Leo Lionni——

Masaki Jinno

Teachers must think about literary teaching that could enable learners to engage in imaginative activity.

I tried to establish various states of learning which compel the learners to acquire rich imagination.

The aims of this paper are to report examples of establishment [in which a child could use when he becomes a newspaperman and when he writes articles] about the state of learning with imaginative content for the learners.